

## 宋元時代の紅巾軍と元末の彌勒・白蓮教匪に就いて (上)

重松, 俊章

<https://doi.org/10.15017/2340917>

---

出版情報 : 史淵. 24, pp. 79-90, 1940-11-20. 九州帝国大学法文学部  
バージョン :  
権利関係 :

# 宋元時代の紅巾軍と元末の彌勒・白蓮 教匪に就いて (上)

重 松 俊 章

## (一) 導 言

唐宋時代の彌勒佛の轉生説に假托して流行した彌勒教會と宋元時代に彌陀念佛の淨業團體の一種から發展した白蓮教會とは支那に於ける佛教系統の二大異端教匪として、唐宋以來支那の社會的暴動、特に農民一揆に指導的役割を演じて歷朝統治の心腹の痛となつたものである。従て支那中世時代の社會史の研究に取つては此の問題は特に重要な地位を占むるものなるにもかゝらず、從來支那史家が動もすれば此の問題を閑却し去りたる觀あるは洵に遺憾の極みといはねばならぬ。

私は年來此の問題に重大關心を有し、先年既に此等二大教匪の發生の事情やその社會的運動の歴史的發展過程を討究した事があるが、<sup>一、註</sup>當時その敘説の範圍は専ら隋唐五代から宋元に亘る間に止まり、元末以後に觸れなかつたから、その續編の一部として此處で改めて元末の大亂を起して蒙古大帝國（元朝）を崩壞に導いた當時の彌勒・白蓮教匪の活動の歴史を概觀し、併せてその先驅とも見るべき宋元時代の紅巾軍の起源や活動の情況を考究することとする。

宋元時代の紅巾軍と元末の彌勒・白蓮教匪に就て

(一) 彌勒・白蓮兩教の關係

之に先ち初に一言すべきは彌勒・白蓮兩教會の本質とその相互の關係とである。彌勒教匪は大體六朝末期から隋代にかけて彌勒佛の兜率淨土やその再來下生の佛傳に附會して生れ出たる祕密經會の類で、唐五代を経て北宋末期に至るまでを大體その興隆期となし、元末の大亂期には白蓮教匪の勢力と混合して活躍を續け、それ以後は實際上、白蓮教中に包含化されて獨立の存在を認められないやうになつた。<sup>(1)</sup>元末大亂期の紅巾軍（又は紅軍、香軍）と稱するものは概ね斯かる彌勒教その他の更生佛（燃燈佛の如き）教匪と白蓮教匪との混合團體の別名に外ならぬと考える。而して此の大亂期に當て最も早く之等の紅巾匪が現はれたは元の晋宗泰定二年（西紀一三二五）六月に息州（河南息縣）に叛亂を起した趙丑斯・郭菩薩等の妖教徒で、叛亂當初、彼等の掲げた口號は彌勒佛當有天下といふのであつた。之に次で順帝至元三年（西紀一三三七）二月河南陳州（河南淮陽縣）の妖教徒棒胡（本名胡閻兒、以長棒技得此名）が亂を作して歸德府（河南商邱縣）の鹿邑に本據を置いて汝寧（汝南）信陽州（信陽）等の諸州縣を攻略したが當時彼等の使用した徽號に彌勒佛の小旗があつたと云はれてをる。之等はいづれも當時に於ける彌勒佛教匪と認められ得るものであるが、唐末五代の大亂期に彌勒佛教匪と相並んで流行した燃燈佛（一名定光佛）教匪も亦この元末に當つて叛亂を起してをる。それは棒胡と同時の至元三年（一三三七）三月に惠州歸善縣（廣東惠陽縣）の民聿秀卿・譚景山等が朱光卿と結んで定光佛の出世に假托して叛亂を作した事があつた。定光佛（錠光佛）は一に燃燈佛（然燈佛）とも云ひ、瑞應經に據ると釋迦佛の前に世に出で、衆生を攝化濟度した佛で、釋迦に對して次の劫に出度生の記別（豫

言)を興へたと云はるゝ更生佛の一種である。(2)

次に白蓮教は如何。之は元、南宋初期に蘇州延祥院沙門茅子元の主唱にかゝる彌陀念佛の淨業團から發達したものであるが、當時既成佛教の僧俗に依て異端邪宗門として迫害せられ、當局から布教を禁止されたので爾來宋元時代を通じて祕密經會として社會の裏面に潜行してゐたが時代の推移と共にその本來の面目が著しく低落頹化するやうになつた。併ながら元の仁宗の治世に福建の白蓮教會は一時、朝廷からその布教を公認保護されたこともあつたが、その後間もなく英宗の世に布教を嚴禁されて、元末の大亂期に至つたものである。(3)

かゝる歴史を有する白蓮教會は元末の頃になると何時しか彌勒教匪と混淆雜合する傾向を帯びて來たやうである。その一例は元の順帝至正十一年(一三五二)五月潁州(安徽阜陽縣)に據つて叛起した杜遵道・劉福通等の白蓮教徒は元、欒城(河北欒城縣)の妖教首韓山童・韓林兒父子等の教旨を奉じ、山童を以て宋の徽宗八世の孫で、彌勒佛の權化再生と爲し『天下大亂・彌勒佛下生』と倡へて韓氏父子が當に天下に君臨すべきことを主張し叛亂を起したのであつた。かくて彼等は相次いで朱阜(安徽阜陽の南)羅山(河南)眞陽(河南正陽)確山(河南)武陽(河南西平)葉縣(河南)等の潁水本支流域の諸州縣を校陷劫略し次いで淮河の上流亳(安徽)に據つて韓林兒を擁立して皇帝と呼び國を宋と號し、改元して龍鳳元年といひ、河南・安徽・山東・江蘇・湖北の渚省に勢威を震ふことになつた。(4)

元史順帝紀は當時の情勢を記して左の如く云つてをる。

至正十一年五月辛亥(廿八)潁州妖人劉福通爲亂、以紅巾爲號、陷潁州。初欒城人韓山童祖父。以白蓮會燒香惑衆。謫徙廣平永平縣。至山童。倡言『天下大亂。彌勒併下生。』河南・江淮愚民。皆翕然信之。

此の文によると韓山童等の白蓮教會が隋唐以來民間に潜行してゐた彌勒教の教旨を攝取してゐる事實が推測せらるゝのである。

以上の記述を綜合する時は大體下の如き事實が認定せられ得るやうである。即ち、唐宋時代に汎行した彌勒教會は一時社會の表面から影を沒したが、元末に至つて趙丑斯・郭菩薩や棒胡などの徒に依つて再び之が社會の表面に浮び出で、更に韓山童・韓林兒等父祖數代に亘つて傳承され來つた宋元時代の白蓮教會と合流して遂に元末の紅巾軍の大匪亂にまで發展し來つたもので、當時の彌勒教匪は實際上、明代以後に一大發展を爲した白蓮教と混合同化してそれらの統一的勢力の下に元末の紅巾軍の一大教匪團が成立したものと考へて差支ないやうである。

フランスの東洋學者 Edouard Chavannes, Poul Pelliot 兩氏は曩に協同して支那史料に基づいた摩尼教の解説を *Journal Asiatique* (1911, 1913) 誌上に發表したが、その中の一節で、大要下の如き意見を述べてゐる。

『De Groot 氏 (和蘭の東洋學者) は大明律集解附例中の妖教禁止令の『妄稱彌勒佛。白蓮社。尊明教。白雲宗等會。』とある文句を翻譯して、彌勒佛の下に *Secce* (教派・教會) といふ文字が省略されてゐるので『彌勒佛・白蓮社』を結合して一個の宗門として『彌勒佛の白蓮教會』(Communauté du Lotus blanc du Buddha Maitreya) と翻譯してゐるが、之は明かに兩つの教派に屬するもので、此のことは大清律の集解によつても明かである。現に De Groot 自身も既に他の場所 (*De Groot, Secretarianism, P. 291*) に於て、彌勒教會 (*La Secce de Maitreya*) の存在を載せてをり、又此の教會は獨立に、白蓮教會よりも遙に汎く流傳されてゐたものである。而して大清律令集解では斯かる混亂を醸してゐない(彌勒教會と白蓮教會とが截然區別して書かれてある)。併ながらいづれにしても此の二つ

の教會は蒙古人を驅逐する際（元末大亂時）には協同して活動したやうであるし、又恐らく彼等は結縁類似（Apparentes）のものであつた事は否定出来ない事實である』といふ意味を述べてゐるが大體に於て穩健の説である。但余は元末以後彌勒教匪が殆ど史上から影を沒したのに反して白蓮教匪の勢力は時代の下ると共に益々猖獗を極めてゐる事實により、元末大亂期を一期として彌勒教會が實際上白蓮教會に混合同化して思想的に白蓮教が之によつて一層擴充強化されたものと考えられるのである。從て大清律令に白蓮教會と相並んで彌勒教が異端宗門として禁止されてゐるとしても、それは清律が明律の舊規を慣例的に踏襲して將來に於ける彌勒教匪の暴動に備へると立法者側の細心の注意によるもので、之に由て清代に彌勒教會が實際に存在してゐたとの理由とはなり得ないものと考えへる。

## （一）注

唐宋時代の彌勒教匪。附更生佛教匪。（史淵第三輯（昭和六年十二月刊））

初期の白蓮教會に就て。附元律中の白蓮教會（市村博士古稀記念東洋史論叢）

## （二）注

（1）唐宋時代の彌勒教匪、注解三

（2）元史泰定帝紀及び順帝紀

（3）初期の白蓮教會に就て參照

（4）元史順帝紀、權衡庚申外史、俞本皇明記事錄（錢氏群雄事略所引）葉子奇草木子等參照。

（5）Ed. Chavannes et P. Pelliot; Un traité manichéen retrouvé en chine (Journal Asiatique, XI<sup>e</sup> Série Tome 1, 1913,

P. 368 note 3.

尚 P. Pelliot 氏には白蓮宗と白雲宗 (La Secte du lotus blanc et la secte du Nuage blanc. B. E. F. E.-O., III, 311-317, IV, 437-440) とする論文があるが (ibid. J. A.) 余の手許には殘念だが Bulletin de l'École Française d'Extr-

宋元時代の紅巾軍と元末の彌勒・白蓮教匪に就て

éme-Orient III, IV が無<sup>い</sup>の<sup>を</sup>之を参照することが出来な<sup>い</sup>。

元末白蓮教主の韓林兒が小明王の號を採用したことから推しても此の教匪が唐宋時代の彌勒教匪と不可離の關係に立つてゐたことが判かるのである。何となれば大小明王の再來降臨の説は主として唐代以來彌勒教匪の主倡せる重要教旨の一であつたからである。

### (三) 宋元時代の紅巾軍と紅巾の意義

元末の彌勒・白蓮諸教匪がいつれも紅巾を以てその標號とした爲めに紅巾軍を以て元末大亂期の諸教匪の別名とする一般傾向があるが、それは以ての外の誤謬といはねばならぬ。先づその糾謬の意見を述べる前に一應紅巾の字義を究明する必要がある。この文字の説文學上の煩瑣な考證は姑らく専門學者の手に委ねることとして、巾字には頭巾若くは幘頭の意義と、巾幘の如き領巾の意義とが普通に使用さるゝ處である。紅巾の文字が果して前者に屬するか後者に使用されたかの明文はない。明の葉子奇の草木子（卷三雜制篇）に、

紗帽圓領。唐服也。仕者用<sup>レ</sup>之。巾笠襦衫。宋服也。巾環襖領。金服也。帽子繫腰。元服也。方巾團領。明服也。庶民用<sup>レ</sup>之。

と歴代の服裝を列舉した文があるが、其の中の巾字は明かに帽と同じく頭に戴く幘頭々巾の類を意味するものであらう。漢代の黃巾匪も後漢書章懷太子注に引く處の晉の楊泉の物理論に據ると、

黃巾、被服純黃。不<sup>レ</sup>將<sup>ニ</sup>尺<sup>ハ</sup>兵<sup>ヲ</sup>。肩<sup>ニ</sup>長衣。翔行舒步。所<sup>レ</sup>至郡縣。無<sup>レ</sup>不<sup>レ</sup>從。是曰<sup>ニ</sup>天<sup>ノ</sup>大黃<sup>一</sup>也。

とあつて彼等が純黄の衣服を着けてゐたことは明かであるが、此の上に更に黄色の頭巾を戴いてゐたと思はるゝ點は後世の道士が黄衣黄冠を着けてゐた事實から大體想像がつく譯である。梁の僧祐の弘明集（卷七）に収録せる劉宋の沙門僧愍の『戎華論』に

首冠<sub>○</sub>黄巾<sub>○</sub>者。卑鄙之相也。皮革苦<sub>レ</sub>頂者。眞非<sub>○</sub>華風<sub>○</sub>也。

とあるは劉宋時代の道士（五斗米、太平道の道教士）の風俗を攻撃したものであるが、之は正しく漢魏時代の太平道や五斗米道の黄巾教徒の遺風を傳承してゐるものと考へらるゝから漢代の黄巾匪が單に身に純黄の衣服を着けしのみならず、頭にも又黄色の頭巾を戴いてゐたと考へても敢て不當の臆測ではあるまい。此の事實からして元代の紅巾匪の風俗を類推することは、或は時代の推移に伴ふ風俗の差異を無視するの嫌はあるが、それにも係らず余輩は宋元時代の紅巾を以て紅色の頭巾若くは幘頭の類と確信するものである。その一つの傍證として次の引例が重要な役目を果たすであらう。即ち、元末明初の長谷眞逸の手になる農田餘話（寶顏堂祕笈、廣集）に

元世祖。城<sub>○</sub>燕都<sub>○</sub>。土中多掘<sub>○</sub>出<sub>○</sub>紅頭蟲<sub>○</sub>。問<sub>○</sub>於劉太保秉忠。劉對曰。後世壞<sub>○</sub>天下<sub>○</sub>。此類也。世祖曰。此必西番家也。  
（元注云吐番。皆戴紅帽）故取<sub>○</sub>西番人<sub>○</sub>。作<sub>○</sub>帝師<sub>○</sub>。以厭<sub>○</sub>。……殊不<sub>○</sub>知<sub>○</sub>亡<sub>○</sub>紅巾之亂<sub>○</sub>。

とある。話の筋は荒唐無稽で勿論信用に値しないが、此の文面に由て見ると當時の紅巾匪賊が紅帽を戴いて之を以て叛徒の徽號としてゐた事實を否定することは出來ない。

次に紅巾軍は必ずしも元末の大亂期に突然發生したものでなく既に宋代から一部匪賊や郷勇の間に行はれてゐたものである。余の知れる限りでは之に關する文献は已に南北宋の交會期から現はれてをる。宋の徽宗宣和二年（西紀一

一二〇) 十月、陸州青溪(浙江淳安縣)の妖民方臘が叛起した時、その麾下の諸將を部署にするに紅巾より以上六等の巾飾を以てしたことが宋史童貫傳や方勺の青溪寇軌に見えてをる。之はその徽號を紅巾にのみ限つたわけではないが紅巾がその徽號の一つに採用された點で注意を必要とする。之に次いで紅巾のみを徽號に採用した鄉勇の屬が南宋初期に河東地方に現はれてをる。即ち高宗建炎元年(一一二七)十二月、山西土民が金に叛いて紅巾を徽號として所在に蜂起し城邑を攻略した。熊克の中興小記(卷二)は此の事實を傳へて、

(建炎元年十二月)河東之民。心懷本朝(宋)。所在結爲紅巾。出攻城邑。皆用建炎年號。見有脱身南歸者。往々助以衣糧。且言。『俟天兵過河。亦不須多。當藉聲勢。盡執敵人戮之。』金衆之在河東者。移遷以北去。云々。

とあるが今日山西の共產八路軍のゲリラ戰術を彷彿させるものがあるではないか。

之に次ぐ紅巾軍の例は宋史洪皓傳に

(前略)成(李成)方與耿堅共圍楚州。責權州事賈敦詩。以降敵。實持叛心。皓先以書抵成。成汨涸虹。有紅巾賊。軍食絕。不可往云々。

とあるが、之は建炎三年春夏の頃彼の著名な(南宋の)儒臣)洪邁の父で、松漠紀聞の著者として知られた洪皓が淮南の盜賊李成を招降し、之に書を遣つて楚州の叛臣賈敦詩を攻落せしめんとした時に、元來此の時宋に對して二心を懷いてゐた李成は汨河の流が涸渴して、その流域に土匪の紅巾軍が跳梁し軍食に乏くて往來が杜絶してゐることを口實として洪皓の要求を體よく拒絶したことを述べたものである。即ち之によると高宗建炎三年頃に淮の南北に紅巾を徽號とせ

る土匪の盤據してゐた事實が判らう。

次に宋の徐夢莘の三朝北盟會編（卷一三八）に據ると、高宗建炎四年四月宋將韓世忠が金軍に敗られて鎮江に遁げ還つた時、長蘆（江蘇六合縣東南）の崇福禪院の行者等が寺の行者や郷黨の強壯を募つて紅巾軍を組織し、亂兵の侵劫に備えたが韓世忠は之を策應して金兵を拒いだことがある。即ち、北盟會編はその當時の事情を記して下の如く云つてゐる。

長蘆崇福禪院行者。普倫・普璉・普贊。結集行者及強壯百姓千餘人。分爲三隊。在揚州洲上。自相守保。世忠嘗約普倫等。爲策應。至是普倫・普璉・普贊。率其衆千餘人。駕小舟千餘艘。皆裹紅巾・紅幟。來策應。之に由ると崇福寺の紅巾軍は、寺僧や郷黨から募集した一種の郷勇團練の類で亂兵の侵入を拒んで郷村を防衛する目的から成立したものであつたやうである。此の外、清の王昶の金石粹編（卷一五〇）収録の韓蘄王（韓世忠）碑文によると宋欽宗の初、河南濬州（黃河北方の濬縣）附近にも紅巾賊が出沒して宋の河防軍を惱ましてゐた記事があるが、之は戰亂の結果窮民の組織せる地方の土匪軍であつたらしい。(1)

以上は主として南宋高宗時の紅巾軍の例であるが、その次の孝宗の世にも依然として淮の南北に紅巾土匪が跋扈してゐた記述が、宋史孝宗紀に載つてゐる。即ち

乾道元年冬十月乙巳。淮北紅巾賊。踰淮劫掠。立賞討捕之。已而知楚州胡明。遣巡尉。擊殺其首蕭榮。とあるのが、その實例である。

南宋時代には獨、山西や淮・泗方面に限らず、湖北、四川の如き西邊の地にも紅巾匪賊が叛亂を起した事實がある。

即ち、宋史寧宗紀に據ると、

嘉定十二年（一一二九）三月癸亥。興元軍（湖北陽新縣）士張福・莫簡等作亂。以紅巾爲號。……秋七月丙申。張福伏誅。庚子張威（四川沔州都統）捕賊衆一千三百餘人。誅之。莫簡自殺。紅巾賊悉平。

とあるが、此の叛亂の一層詳しい記録は劉時舉の續宋中興編年通鑑（十五、）に見えてゐる。今煩を厭はず之を引用すると、

嘉定十二年閏三月癸亥。興元軍士、張福・莫簡等作亂。以紅巾爲號。四月入利州（四川廣元）。制置彞子述遁。總領材賦・楊九鼎爲所殺。由是掠閬州（四川閬中）果州（四川南充）。五月逼遂寧府（四川遂寧）。攝府事程遇孫棄城去。福禁其城。四川宣撫司。命沔州都統張威捕之。福入普州（四川安岳）。守臣張已之。棄城去。福屯於普州之石（若？）山。庚午威引兵圍若山。凡十四日。莫簡自殺。福請降。威執之以歸宣撫司。誅之。

とある。之によると此時の紅巾匪賊は湖北から起つて四川省の東部嘉陵江流域の各都邑を劫掠焚陥して暴威を逞ふしたものであつた。

以上は宋代に於て各地に蜂起した紅巾軍の實例であるが、紅巾の語が當時一般に叛徒や匪賊の別名として通行してゐた事實は下の一例に徴しても明かである。即ち宋元時の周密の齊東野語（卷十三）に

近者已亥歲史一字之爲京尹。其弟以參政。督兵於淮。一日內宴。伶人衣金紫。而幘頭忽脫。乃紅巾也。或驚問曰。賊裏紅巾。何爲官亦如此。傍一人答曰。如今做官底。都是如是。於是褫其衣冠。則有萬回佛。自懷中一墜地。其傍者云。他雖作賊。且看他哥々面。

こい文がある。之は宋室の俳優等が宮延の宴會の際、餘興として一種の戯劇を演じて當代の世相を調刺したもので、當時の官僚は皆悉く紅巾匪賊と何ら擇ぶ處はないがそれでも兄弟の親愛を忘れてゐないのは感心であるとの意を寓したものと見える。萬回佛は唐代以來和合の神として、之を祀れば人をして萬里の外にあるといへども能く家に回ることを得せしむるといふ靈驗新たなるものとして汎く俚俗の間に信仰され來つたものである。<sup>(3)</sup>

此の文に近者己亥歲史〇之爲京尹云々。とあるが、齊東野語の著者周密は宋理宗の紹定五年（西紀一二三二）に生れ、元の武宗至大元年（一三〇八）七十七歳で歿してゐるから、從て此處に己亥歲とあるは宋の理宗嘉熙三年（一二三九）か元の成宗の大德三年（一二九九）でなくてはならぬ。宋史理宗紀にも元史成宗紀にも此處に引用した齊東野語の文に因んだ記載は見えないが、己亥歲史〇之爲京尹。とあるに依て考ふるに之は南宋理宗の末年に宰相となつて收賄狼籍を極めたとの惡評を受けた史嵩之を指せるものゝやうである。彼の傳は宋史（卷四一四）に見えてゐるが、その中には彼が京尹に任せられたことも、亦その弟某が淮の督帥に補せられたことも全く見えてゐないから、此の優伶の戯劇に見えてゐるものが果して史嵩之かどうかを決定することは頗る困難である。併乍ら宋史の列傳に據れば史嵩之は一國の宰相にして收賄請托などに因て私利を營み、その從子の史璟卿に苦諫されたり、又數百人の大學生から上書して排斥されたりした事實に因つて見ても恐らく當時の優伶の徒からも史嵩之の行爲が、紅巾匪賊の爲す處と何ら擇ぶ處のない所以を諷刺される充分の理由があつた筈である。

然らば元末の大亂期に蜂起した彌勒・白蓮等の諸教匪が殊更に、前代から匪賊の徽號として普く知れ亘つた紅巾を以てその標識とした理由は如何。苟も元朝の秕政に反對して一種の義軍（？）を起したと誇號してその中から明太祖

を出し革命を大政した位の之等の教匪團體が、自から好んで匪賊の商牌を掲げたといふことは事理に於て解釋し難い事柄である。

斯様に考えて來ると紅巾には匪賊の意味があるとしても、其は世間尋常の草賊匪徒とは異なり、横暴恣虐の當代の官僚又は統治者を始め富家豪族の輩に反抗して、虐げられたる下層民衆の味方となつて義舉を圖る一種の勇俠義軍の團體といふ意味をも多分に含んでゐたものではないだらうか。かゝる風潮が既に宋代から支那社會の一部に存在してゐた事は彼の宋江等の水滸（梁山濼）義師の傳説が汎く一般社會を風靡した事實に徴しても此の間の事情が充分に理解出來るであらう。（昭和十五年九月末日）。

### 三の注

(1) 韓勣王碑（王親キチ金石粹編卷一五〇）の原文は下記の如し。

欽宗即位之初。王方キチ從キチ梁方平。防キチ三河キチ潞州。金人大軍。已キチ壓キチ潞キチ境。方平漫不キチ顧。以爲キチ他盜。王說曰。今之來者。

金虜耳。願公速整キチ三行陣。爲キチ護河計。河失キチ守。宗キチ陸危。公可キチ忽乎。王忠憤由キチ中。詞氣激烈。方平怒。俾キチ下キチ王キチ以キチ三十騎。

當キチ上キチ敵。名曰キチ硬探。實欲キチ致キチ王キチ死地。王遇キチ敵キチ輒キチ戰。以キチ實歸報。方平猶以爲キチ紅巾賊キチ不キチ設キチ備。及キチ虜進迫キチ屯子橋。

則方平キチ脫キチ身遁矣。王師既失キチ主帥。數萬之衆皆潰。云々

(2) 此處に、帽頭忽脫乃紅巾也。とある記事も亦紅巾が頭巾の類であつた一つの證據として役立つであらう。

(3) 萬回佛に關する資料は左記の諸書を参照すべし。

(a) 唐の段成式、酉陽雜俎（卷一及び三）

(b) 唐の鄭棨、開天傳信記

(c) 太平廣記（卷九十一、九十二）

(d) 元の劉一清、錢塘遺事（卷一）

(4) 明・錢謙益の國初群雄事略、（小明王、滁陽王傳）和田清博士天明太祖と紅巾賊（東洋學報一三〇の二）